

Title	<書評>藪亨著「デザイン史：ヴィクトリア朝初期からバウハウスまで」
Author(s)	渡辺, 眞
Citation	デザイン理論. 2003, 42, p. 130-133
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53195
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

藪亨著

『近代デザイン史 — ヴィクトリア朝初期からバウハウスまで —』

丸善株式会社 2002年

渡辺 眞／京都市立芸術大学

はじめに

藪会員の待望の書である。イギリスおよびドイツを中心とした近代デザインの誕生から発展期について、長年の研究成果が結集したものである。デザイン史観の基調は、あとがきでも述べられているように、ニコラス・ペヴスナーの『モダン・デザインの先駆者たち』に沿ったものだが、ペヴスナーが描いた素描を補完したものになっている。全体は、教科書的な意味合いもあってか、項目ごとに簡潔にまとめられており、読みやすい。その概要を紹介しつつ、思うところを述べてみたい。

概 要

まず項目的には、第1編「19世紀におけるデザイン」、第2編「20世紀におけるデザイン」と大きく2部に分けられている。前半では、「ヴィクトリア朝初期におけるデザイン振興」「第1回ロンドン万国博覧会とデザイン」「ラファエル前派運動をめぐって」「アーツ・アンド・クラフツ運動をめぐって」「ドイツにおける産業美術の近代化」というように、主にイギリスにおける展開、後半では、「機械時代とデザイン」「近代産業とデザイン」「ドイツ表現主義とデザイン」「メディア芸術とデザイン」「バウハウスとモダン・デザイン」という表題の下で、ドイツ工作連盟からバウハウスへの展開が主題になっている。

もう少し細かく見ておくと、「ヴィクトリア朝初期におけるデザイン振興」では、イギリスにおけるデザイン学校の成立とウィリアム・ダイスの活躍、ヘンリー・コールのデザイン活動やデザイン行政上の活躍、彼の編集

による『ジャーナル・オブ・デザイン』誌の発刊とその内容が紹介され、特にダイス等の装飾論あるいはデザイン論が取り上げられている。この時期、コールを中心に「芸術と産業の関係の改善」を目指してデザイン振興が図られ、デザイン学校もその流れに位置づけられるのだが、学校での教育が素描教育に偏り、製造現場との乖離がひとつの問題であった。

「第1回ロンドン万国博覧会とデザイン」では、博覧会の成立状況や内容を紹介するとともに、『1851年万国博覧会アート・ジャーナル誌図録』の付録としてついていたラルフ・ウォーナムの評論に注目している。「自然主義派」の過剰な自然模倣を批判し、「伝統的様式」の重視を主張しているが、未だ表面装飾、模様装飾のレヴェルでの論争に止まっている様相がみてとれる。博覧会後の「実用美術局」の動きや「装飾芸術博物館」の設立の動向も詳細に追われている。

「ラファエル前派運動をめぐって」では、生活の中での芸術として、絵画や彫刻ではなく、最初は詩など本の挿絵に注目し、家具作りにも関心を広げていく動きが、ラファエル前派に見出されている。この運動の帰結という捉え方であろうが、この項目の下で、ウィリアム・モリスを中心としたモリス商会の活動が詳述されている。

「アーツ・アンド・クラフツ運動をめぐって」では、モリスの装飾芸術論が引用を通じてまとめられ、その後が続く様々な「美術職人ギルド」の成立、活動、さらに「アーツ・アンド・クラフツ展覧会協会」とモリスの関

係が論述されていく。人々の生活に関係する領域に芸術家が直接関与する状況が生まれていくが、しかし、手工芸的、一品制作的には、生活の中での造形が実現されたとはいえ、産業を介しての生活造形の場は、イギリスからドイツへ移される。

「ドイツにおける産業美術の近代化」では、イギリスに学んだゴットフリート・ゼンパー、その影響を受けたヤーコブ・フォン・フェルケの思想と活動、「オーストリア美術・産業博物館」、「ベルリン産業美術博物館」の設立などが、オーストリア、ドイツにおける初期産業美術振興運動として捉えられている。続いて美術家による生活造形への参加の動きとして、ユーゲントシュティールおよびダルムシュタット芸術家村の活動が辿られている。

「20世紀におけるデザイン」と題された第2編では、機械生産を容認したデザインへの展開が綴られていく。まず「機械時代とデザイン」では、20世紀初頭にあって、機械生産に抵抗したヨーゼフ・ホフマンとウィーン工房の活動、さらにモリスに影響を受けながらも機械生産や近代産業を受け入れていったヴァン・デ・ヴェルデとモリスの関係がマイヤー・グレーフェやサミュエル・ビングの証言に基づいて語られ、ヘルマン・ムテジウスの思想と活動へと展開されている。

「近代産業とデザイン」では、最初の工業デザイナーとも言うべきペーター・ペーレンスのアルゲマイネ電気会社でのデザイン活動とドイツ工作連盟の成立と展開が取り上げられている。

「ドイツ表現主義とデザイン」では、初期バウハウスの表現主義的傾向と成立背景としての風土を語るものとしてブルーノ・タウトの『ガラスの家』が取り上げられ、「芸術労働評議会」とその主催展覧会『無名建築家展』の動向と概要が紹介されている。

「メディア芸術とデザイン」は、流れからはバウハウスが主題にされるところであるが、バウハウスもその革新の中心地となったタイポグラフィーの分野に視線を広げ、写真の導入を含めたモダン・グラフィックの展開が辿られる。

最後が「バウハウスとモダン・デザイン」と題して、デ・ステイルとの関係から始めて、デッサウ以降のバウハウスとその波及の跡が綴られている。

以上ざっと概要を眺めたのであるが、近代デザイン史の基本線を丁寧に叙述したもので、特に当時の著書や雑誌が詳細に読破され、各所に適切に引用されている点に、藪会員の長年の研究成果であることが十分に看取できる。

デザイン史の現在

ニコラス・ペヴスナーの書に始まり、1980年代におけるイギリスを中心としたペヴスナー的近代デザイン史の見直しとともに、ヘスケット、スパーク、フォーティなどの歴史書が生まれたが、進歩史観に対する懐疑や中心となる事象の拡散もあって、20世紀後半を含めたデザイン史は困難に直面している。日本では、勝見勝の『現代デザイン入門』以降、デザイン史の書と言えるものはなかったが、1990年代以降、1995年の美術出版社の『世界デザイン史』、2002年の海野弘の『モダン・デザイン全史』などいくつか出始めている。特に海野の書は意欲的なものとして注目される。ここでも20世紀後半部分については、明確な方向性が見出しにくい。しかし、学会誌の論文などでも、史実に基づいて、歴史事象を詳細に究明しようとする姿勢が見出されるようになってきたし、藪会員の本書でも、また海野の書にあっても、かつてペヴスナーが素描したにすぎなかったものが、豊かな史実によって補完されようとしている。

個人的な興味も含めて、ひとつ論点を取り出して比較してみたい。それは近代デザインの始まりの問題である。海野の著書では、モダン・デザインの始まりを1830年代に置くという明確な表明に興味がわく。ロンドンに代表されるような、都市化と大衆出現の進展、それに伴うデザインに対する需要と意識の変化をそこに見出しているのである。「ソサエティ・オブ・アーツ」の活動や、1830年代に始まったデザイン学校の開校に根拠としての史実を見ている。藪会員の書でも、直接の言明はないものの最初の小表題は、「デザイン学校」の出現である。「デザイン」が定着し、その人材養成が社会的な必要事になったことを意味し、注目にたる史実である。しかし、海野は、

しかし、ファイン・アート中心の保守的な教育が中心となり、新しいデザイン教育はおこなわれていた。(p. 31)

と、否定的に軽く扱っているが、藪会員の書では、

そこで最初に授業に取り入れられたのは、建築的細部、壺形装飾、渦形装飾、さらには幾何学的図案や植物形態であり、これらの装飾モチーフの模写に力点が置かれている。

と、教育内容を紹介した上で、ファイン・アート中心というより、むしろ「デザイン学校と美術アカデミーの差異化」が目論まれたカリキュラムであったことが指摘されている。初期から教育に関与したウィリアム・ダイスの考え方と活躍が紹介されているが、模写の模写教育に終始していた教育に対して、海外視察の影響もあって、製作現場たる工房教育の必要を唱えるなど、問題点の認識はなされていたことがわかる。

造形における構想段階と製作段階の分業化が、量産とともに社会的必要として成立し、

構想段階の専門家（初期は表面装飾のための下絵や立体モデル制作）としてデザイナーが誕生するのだが、ここに近代デザインの成立を見るだけでは、後のモリスたちの意義は明確化しない。材料と技術の特性を反映した造形、つまり製作段階を反映した構想過程となるべきはずのところ、分業化とともに乖離が始まったというところに、解決すべき課題とともに近代デザインが始まると考えうる論点の一つが見出せる。ここでは、これ以上具体的な内容に入る余裕はないが、それぞれの項目が簡潔にまとめられ、必要なところでは、詳細な記述、適切な引用がなされている。

民衆にとっての理想的生活が、人それぞれが描くべきものに行き着いてしまった感のある今日、至るべき目標に向かっての歩みとしてデザイン史を綴ることが困難になっている。それでも歴史を綴るとしたら、人々が何を考え、どのように工夫したのかを具体的に知りたい。そのためには、可能な限り当時の人々の言説や活動に触れる事が必要で、その点で藪会員の書は、先学の研究書はもちろん、当時発行された書や雑誌に丹念に目を通しており、信頼できるものになっている。

あえて、過剰な要望をすれば、始まりとしてイギリスに注目されているが、ダイスも海外視察で示唆されたところが多かったように、モリス以前でもイギリス以外、特にフランスにおける動きが気になるところである。これまで、アール・ヌーヴォー以前のフランスの動向は、日本では余り紹介されていない。しかし、これは専門領域の問題を考えれば、他に期待すべきか。

最後に

挿入された図版資料について触れておきたい。建築関係が多く、家具や工業製品などは少ない。中でも特筆すべきは、丹念な調査の

結果と言うべき、出版物の表紙や挿絵の図版である。グラフィック・デザインについては、後半に1章が設けられているが、むしろこれらの図版がそのままグラフィック・デザインの資料になっている。又、個別的な興味で言えば、最初に挿入されているピュージン著『コントラスト』の口絵は、皮肉のきいた、それだけ見ても（読んでみても）面白く、また仕事部屋を描いたバーン＝ジョーンズのスケッチも漫画風で楽しい。